

## 施設はこわい

某福祉短大M教授の話。―最も新しい九州の特養ホーム二つを見た。いずれも入り口など外観はちよつとしたホテル並み。一つめはこんな工夫をしたと案内されたのが「開かずの戸」。鍵をガチャガチャさせて開けると左右に二つの個室。埋め込み便器、外内両面に鉄格子。内側からの施錠もできる。完べきな監禁室。精神病院でもない特養では完全なる違法建築だ。厚生省岡光某の犯罪の精神構造とどれだけ違うのか。利用者の悲痛な思いが見えていない。怖い。じつに怖い。

もう一つは痴呆専用特養。ぐるぐる歩いてもとに戻るといふ徘徊専用廊下。職員も外来者も鍵であけてもらわねば出られない。一つの工夫のつもりであろうが、鍵閉じ込め施設と変わりにない。初めて会う施設長が言う。「あなたはどこそこを通ってここに来られたのですね。すべてコンピューターに記録されています。再生しましょう」。私の行動すべてが映像に記録されている。「全員が記録されています」。そんなホームには父母も私も絶対に入らない。

いかに努力しても、エラーは続出し、利用者にとってまことに「施設は怖い」。それを防ぐためのコンピューターであろう。しかし、痴呆でも人権は平等である。人権とは最低自己決定が妨げられず、プライバシーが侵されないことである。機械は人間の便のためのもの、それによるすべての人間の人間性のじゅうりんを許してはならない。徘徊にはすべてそれなりの目的や動機が潜んでいる。

(一九九七年四月三日)